

大学における「主体・能動・対話的で参画型授業」を視点を据えた授業改善の探究 — 大人数授業における授業改善及びその有効性について —

Exploring Class Improvement in Universities with “Autonomous/Active/Participatory Planning-Type Classes” as Their Focus: The Efficacy of Class Improvement in Large Classes

中園 大三郎*・落合 俊郎*・小畑 耕作*・井上 和久*
NAKAZONO Daisaburo OCHIAI Toshiro KOBATA Kosaku INOUE Kazuhisa

要 旨

日本の大学における教育改革は、1991年2月の「大学教育の改革について」と題する大学審議会の答申から始まり、その後、1998年以降にはFD (Faculty Development) が導入され、大学の組織的な研究・研修活動が義務付けられた。現在、各大学においては学生による授業アンケート等も踏まえた授業改善が行われているが、教育現場での問題認識として、学生の「主体性の欠如」「学修意欲の不足」「基礎学力の不足」等が挙げられる。また、教員自身の問題として、従前からの慣れた講義法から抜けきれないことや、学生の主体性等を引き出し参画できる授業への転換意識は十分ではないこと等も挙げられる。そのため未だ教員の一方的・伝達的な講義の現状が見られる。

本研究では、以上の現状を踏まえ、今日の教育改革の主要なテーマである「主体・能動・対話的で深い学びの参画型授業」を視点を据え、大人数が受講する「特別活動の指導法」における授業改善の探究について、その方法・内容や結果を明らかにし、授業改善の有効性等を述べる。

Abstract

Educational Reform in Japanese Universities commenced with a report by the University Council in February 1991 titled “On the Reformation of University Education.” Later, Faculty Development (FD) was established from 1998 onward, mandating organizational research and training activities in universities. Currently, class improvements based on class surveys and so on are being conducted by students at each university. However, issues recognized in the education settings included “lack of autonomy,” “lack of learning motivation,” and “lack of basic academic abilities” among the students. Furthermore, issues faced by the teachers included not being able to detach themselves from the older teaching methods that they were used to and insufficient awareness on how to switch to teaching formats in which students can participate and bring some autonomy to their learning. For this reason, unidirectional classes that simply transmit information from teachers to students are still seen.

Building on the current state described above, the focus of this research will be placed on “a participatory planning-type class for deep learning that is autonomous, active, and communicative,” which is the main topic of educational reform today. Thereafter, this research will clarify the methods, content, and results of this exploration of class improvement for “instructional methods for special activities,” which a large number of students attend, and then describe the efficacy of these class improvements.

キーワード：教育改革，授業改善，FD，主体・能動・対話的で深い学びの参画型授業，特別活動の指導法，

keywords：Educational reform, class improvement, FD activities, “Autonomous/Active/Communicative participatory planning type-class”, instructional methods for special activities

1. 問題と目的

今日、一般に「大学の講義は、授業でなければならない。」と言われるようになって来た。前述の如く、教員の一方的・伝達的な教授法では、学生自身が主体・能

動的に学修できる授業には至っていない実態が見られるので、教員の方から主体・能動的な学修意欲を喚起する手立てを講じることが不可欠である。

このことについては、日本よりも大学の大衆化が早

く進んでいたアメリカでは、1980年代後半から、教員と学生がともに構築する学生参加型授業が行われていた。その授業実践として代表的なものは、1980年後半から米国高等教育学会の研究グループが中心に開発した「優れた授業実践のための7つの原則」(Chickering & Gamson 1987)に基づいた授業が挙げられる。この7つの原則は、従来の対面授業から脱却した効果的な教育の方策として広く用いられ、大きな教育成果を上げたと言われている。

日本では、1998年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の中でようやく「教員の教育内容・教育方法の改善」が取り上げられ、FD(大学教員の教育能力、資質を高めるための実践的方法)の実施が義務化された¹⁾。しかし、従前の大学における一般的な授業法からの脱却は容易ではない状況が見られる。

このような状況にあって、本研究では、多人数受講の「特別活動の指導法」の授業において、学生たちの積極的な授業参画により、主体・能動・対話的で深い学びの姿勢を引き出す授業改善の探究に取り組み、その有効性を具体的に明らかにしたい。

2. 研究仮説

(1) 多人数受講の授業においても米国高等教育学会「優れた授業実践のための7つの原則」の実践手法と授業科目の特質に合った実践手法を導入し、教授パラダイムと学習パラダイム²⁾を意識した授業改善を行うことにより、学生の主体・能動・対話的で深い学びの姿勢を引き出すことができるであろう。

(2) 授業に学生の役割や交流・発表場面等を多く設定することにより、参画型授業に高めることができるであろう。

3. 研究の内容

(1) 主体・能動・対話的で参画型の授業改善への必要性

近年のグローバル化の進展や人工知能(AI)の飛躍的な進化等により、ますます激しく変化する厳しい時代に合った大学教育の再構築が求められている。

わが国では、1998年10月26日 文部科学省大学審議会において「21世紀の大学像と今後の改革方策について」答申が提言され、その中で「各大学は、個々の教員の教育内容・方法の改善のため、全学的にあるいは学部・学科全体で、それぞれの大学等の理念・目標や教育内容・方法についての組織的な研究・研修(FD: Faculty Development)の実施に努めるものとする旨を大学設置基準において明確にすることが必要。」³⁾であると示された。

したがって、旧態依然とした一方的な伝達型教授法から脱却し、学生たちが主体的に授業の企画・実施に参画できる授業⁴⁾を工夫し、主体・能動・対話的で深い学びに繋がる教授法、いわゆるアクティブラーニングを組織的に推進して、21世紀の大学像の具現化を図らなければならない。

しかし、今日の一般認識として、学生には主体性の欠如や大学教員の授業改善への取り組みへの不十分さ等の現状が見られる。このことについて、以下(2)で取り上げる。

(2) 学生の「主体性欠如」の問題及び教員自身の問題

公益社団法人私立大学情報教育協会は、2014年5月にアクティブラーニングに視点をおいた「私立大学教員の授業改善白書」を発表した。その中の(1)「学生の学習に関する問題」及び(2)「教員自身の問題」は、本研究と密接な関連があるので下記に引用する。

- 調査対象 協会加盟大学・短期大学の全専任教員
- 大 学 回答人数 16,406名
- 短期大学 々 885名

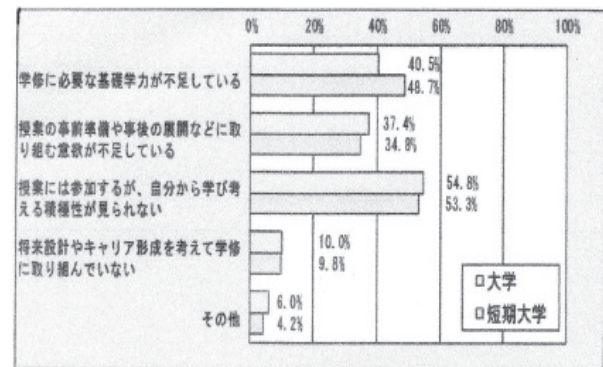


図-1 教育現場での問題意識
「学生の学修に関する問題」⁵⁾

図-1「学生の学修に関する問題」から明らかなことは、学生たちの「授業には参加するが、自分から学び考える積極性が見られない」ことが問題の最上位になっていることである。

したがって、今日、教育現場の焦眉の課題は、学生たちが積極的に授業に参加し、自主的に学びに取り組む姿勢を培うことのできる授業改善にあると言える。

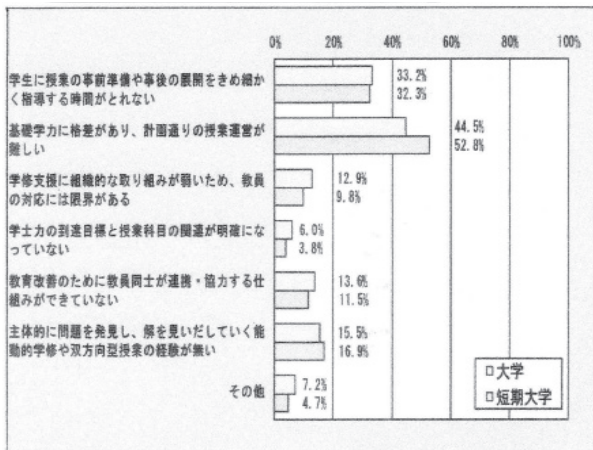


図-2 教育現場での問題意識
「教員自身の問題」⁶⁾

図-2「教員自身の問題」から明らかなのは、私立大学では、「学生の基礎学力に格差があり、授業運営が難しい」「授業の事前準備・事後の展開をきめ細かく指導する時間が取れない」「能動的学習や双方向型授業の経験が無い」「教育改善のため連携・協力する仕組みができていない」「組織的な取り組みが弱い」こと等の問題が見られる。

したがって、本共同研究者は、今日、求められているアクティブラーニングへの授業改善は、教員の強い意識改革や創意工夫の姿勢と実践力や組織的な連携・協力が無いと困難であること等を指摘したい。

(3) 授業内容・方法を改善・向上するFD活動の推進

FD活動は、教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取り組みの総称である。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを上げることができる。

本大学においても、毎年、全学部の合同計画の下でFD研修会を実施している。今年度の研修会では本研究の「自主・能動・対話的で参画型授業」が取り上げられ、中園(本共同研究代表)はその実践手法、教育成果等を発表した。当日、参加者の意見や感想から判断すると、多くの理解を得ることができたと思われる。

(4) 特別活動における「自主・能動・対話的で参画型授業」

特別活動は、小・中・高等学校で、教科・道徳以外の教育課程の一領域として位置づけられており、集団活動を通して、個性の伸長、自主的・実践的態度を育てることを目的とする。特別活動の内容には、学級活動・ホームルーム活動、児童会活動・生徒会活動、クラブ活動(小

学校)及び学校行事がある。いずれにおいても「集団活動を通して人間形成を図る教育活動」であり、そこでの活動過程においては、児童生徒による話し合いが重視され、合意形成に基づいた諸活動により、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとすることや自主的、実践的な態度を育てること、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養うことにある。特別活動で育まれる資質・能力は、あらゆる教育の基盤になると言われている。

大学では、以上の特質を踏まえた「特別活動の指導法」を専門基礎科目(2単位)として開講している。特別活動の方法や内容は、前述の通り、今日の教育課題である「主体・能動・対話的で参画型の深い学習」と重なることは理解できることである。

したがって、共同研究者は「特別活動の指導法」を受講する学生に対して、指導者は初回授業の折、意欲的で自主的な受講姿勢を期待していることや、全員参画型授業の展開により、深く学び取り、理論と実践の融合が図られるようにと説明している。

(5) 大教室における「学生の主体的で参画型な授業」の推進

大学のFD活動でよく取り上げられるのは、比較的少人数指導の事例発表であり、大教室における学生の主体的な参画型の授業で、かつ具体的な実践手法や納得すべき研究成果を取り上げたものは少ない。その背景には、大教室における学生の主体的で参画型の授業は、教員一人では準備等で人手が足りないこと、グループワークやディスカッション等の導入の困難さが伴うこと、教員が指導科目の特質に沿った指導に慣れ積極的な授業改善に至らないこと、また、主体的な双方向型授業の経験不足等にあると考えられる。そのため、どうしても教員が一方的に知識を伝達する講義形式が多くならざるを得ないこと等が挙げられよう。本研究対象の授業「特別活動の指導法」は多人数の学生が受講し、その上、机移動が困難でグループ活動に支障のある大教室で実践してきた事例である。

このような教育環境において学生の主体・能動・対話的で参画型授業を展開するため、主要な手立てとして導入したことは、可能な限り学生全員の役割分担や発表場面を導入し、学生たちが教員と協働し⁷⁾、主体・能動的になって参画できる授業の改善を行ってきたことにある。そして、学生たちが単に授業に「参加する」だけではなく、自らが「主体(主人公)」となって学修課程に積極的に「参画する」意識が醸成され、深い学びの授業になる⁸⁾ことを目指した。また、全員が役割を持つことにより、主人公として授業に関わることができ、自己有用感や責任感、そして、真摯な受講姿勢等を育成できる

と考えた。授業改善の主要な手立てとして取り上げた学生の役割分担を表-1に示す。

役割決めは、学生の希望を尊重しながら役割担当役の

学生に一任して決めた。なお、各役割は指導と評価の一体化や役割内容等を考慮して得点のポイント化を図った。

表-1

大和大学 「特別活動の指導法」 「役割担当の申込み」 (全員) 2017(平成29)年4月12日
 学科 (初 国 数 英 看) 学籍番号() 氏名()

☆ 下表 1~7 の空欄に一人 1~2 役記入する。

希望する役に、学科(初・国・数・英・看)学籍番号(下4桁)、氏名を朱書きで記入。 [例] 国 0011 大和太郎

1. 講義当番の担当 (毎月3名→12名)

4 月			
5 月			
6 月			
7 月			

2. 3分スピーチ担当 発表者(下記3に示したテーマ) 司会者(3分スピーチの進行に当たる。)

回	日程	発表者	司会者
1	4/12	授業概要説明・授業	
2	4/19		
3	4/26		
4	5/10		
5	5/17		
6	5/24		
7	5/31	実習「学級会」(話し合い活動) 役割は下記4の通り	
8	6/7		
9	6/14		
10	6/21		
11	6/28		
12	7/5		
13	7/12		
14	7/19	実習「集会活動」 役割は下記5の通り	
15	7/26		
16	8/2	定期試験	

3. 全員レポート提出→ 提出締切り 7/12 日まで (8/2日の定期試験時、文集にして配付する。)

○「テーマ」下記の中からテーマを選定し、中学校2年生の「朝の会」における学級担任の講話として、分かりやすく話す。
 ・ 恩師、友人、家族、趣味、夢・希望、教職動機、部活動、留学体験、アルバイト、家族、進路、特技発表、休日の過ごし方、風邪予防、健康な体、虫歯予防、偏食予防、薬物防止、熱中症、不登校、他

4. 学級会担当(18×2会場=36名)

○ 第1会場 会場担当(4) (), (), (), ()

前半	司会 (1)	副司会 (1)	黒板 (2)	ノート (2)	写真 (1)
児童司会					
歌 (4)	() () () ()				
後半	担任 (1)	ノート (2)			
担任司会					

○ 第2会場 会場担当(4) (), (), (), ()

前半	司会 (1)	副司会 (1)	黒板 (2)	ノート (2)	写真 (1)
児童司会					
歌 (4)	() () () ()				
後半	担任 (1)	ノート (2)			
担任司会					

5. 集会担当(11名)

全体司会 (2)			黒板担当 (2)
ゲーム 1 (2)			()
ゲーム 2 (2)			()
ゲーム 3 (2)			

6. 実習計画まとめ担当 (2名) ()・()

7. 文集作り担当 (3名) ()・()・()

(6) 本授業における「自主・能動・対話的で参画型授業」づくりの授業改善

① 米国高等教育学会の研究グループらが開発して教育成果を上げた「優れた授業実践のための7つの原則」

(Chickering & Gamson 198)⁹⁾に準拠した実践手法の内容と本授業の特質に合わせた実践手法の双方を取り入れて授業改善を行った。

以下、表-2に本授業で取り入れた実践手法を示す。

表-2 「自主・能動・対話的で参画型授業」実践手法¹⁰⁾

優れた授業実践 7つの原則	7つの原則に準拠した実践手法及び本授業 の特質に合わせた実践手法
1. 教員と学生 のコンタクト	<ul style="list-style-type: none"> ○ 自分の経験や考え方を学生に話す。 ○ 学生を一人のかけがえの無い人間として接する。 ○ 学生に気軽に話しかける。 ○ 出席カードに感想や意見の欄を設ける。 ○ 全員への役割分担 ○ プレゼンテーション、発表時のコメントによるコンタクトの促進 ○ グループエンカウンター ○ アサーション的表現の導入（ほめる、感謝する等） ○ 全員の原稿を文集にして共有し、コンタクトの促進
2. 学生間で協 力する機会	<ul style="list-style-type: none"> ○ 初回の授業では学生がお互いを知り合える活動を取り入れる。（グループエンカウンター等） ○ 4人ずつ30グループを作り、グループワークを行い、その結果を発表する。 ○ グループディスカッション ○ 役割分担における連携・協力(テキスト輪読、プレゼンの司会や質疑応答、授業前後の礼、授業感想の板書) ○ グループ内、全体でのロールプレイ ○ 学生の質問には個人的に答えず、全員に答えて共通理解を深める。
3. 能動的な学 習手法	<ul style="list-style-type: none"> ○ 毎時、授業目標を提示・説明している。 ○ 全員が役割を分担し、責任を持って遂行する。 ○ ワークシート活用により学習内容を共有して取り組む。 ○ パワーポイントの工夫 ○ 予習の確認（毎時配付の出席カードに予習の確認欄あり） ○ 写真や作品等の活用により、理解を促進している。 ○ 授業はじめに問題提起を行う。 ○ グループワーク、グループディスカッション ○ 問題解決学習の導入 ○ グループ内、全体でのロールプレイを取り入れ、学修を深める。

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 配付資料には書く箇所を設け、理解を深めている。 ○ プレゼンテーションで調べた内容を発表する。発表は口頭発表やパワーポイントによる発表後、質疑応答を行い、学修を深める。司会は学生が行う。 ○ プレゼンテーションに対するグループ意見をまとめ発表する。 ○ 授業中、質疑や意見交換を取り入れている。 ○ 学校現場の問題解決につながるような課題を設定する。 ○ 授業の内容が学校現場でどのような意味を持つかを説明する。
4. 素早い フィードバック	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前時の授業感想を当番が板書し、振り返りにより学修を深める。 ○ プレゼン発表者へ各班と指導者の感想を渡し、自らの在り方に活かす。 ○ 発表者に対する質疑応答 ○ 提出物返却時、指導者からの感想を伝える。
5. 学習に要す る時間の大切さ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業の開始時刻・終了時刻の順守 ○ スムーズな指導展開の工夫
6. 多様な指導 法の尊重	<ul style="list-style-type: none"> ○ 成績評価の基準を学生に示して学生と合意する。 ○ 箴言・格言の言葉 <ul style="list-style-type: none"> ・「念ずれば 花開く」「あきらめたら次が無い」 ○ 励ましの言葉 <ul style="list-style-type: none"> ・「いい感じだね」「君の素晴らしさが出ているよ」 ○ 優れた成果を出した学生には全員の前でほめる。
7. 多様な才能 と学習方法の 尊重	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループ学習、全体学習 ○ 希望を活かした役割分担 ○ 座席替え（毎月ごとにグループ移動） ○ 学生の希望や自主性を重んじた集会や話合いの進行 ○ 書き込みのできる資料の配付（朱書き助言） ○ 他人を傷つけるような皮肉や冗談を慎むようにする。 ○ 授業にパワーポイント、ディスカッション、講義、グループ学習、相互学習などを取り入れる。

4. 本研究の検証に関わる調査研究

(1) 本授業を受講した学生の「授業参加意識」「授業理解意識」に関する調査

- ① 対象 本学3年次生 93名 有効回答 87名
(教育学部68名, 保健医療学部19名)
- ② 実施手続き
毎時の終末に配布する下図3「授業出席・振返りカード」に記載している本時の「2. 授業参加意識」と「3. 授業理解意識」について、5件法による回答を求めた。
5:全くその通り 4:その通り 3:どちらともいえない
2:その通りではない 1:全くその通りではない

平成29年度 特別活動の指導法
授業出席・振返りカード

月 日 [月 日]
専 攻 [初 国 数 英 看]
学籍番号 [] 氏名 []

1. テキスト予習 () 行った () 不十分

2. 授業参加意識 5 4 3 2 1

3. 授業理解意識 5 4 3 2 1

4. 授業全体を通して、特に感じたこと・参考になったこと

5. グループ活動時、あなたの主な発言・活動

6. 特に連絡したいこと

図-3 「授業出席・振返りカード」

- ③ 実施時期 平成29年4月19日(受講2回目)
平成29年7月26日(受講15回目)

④ 結果

本授業の開始時4月と終了時7月における学生の「授業参加意識」「授業理解意識」に関わる比較を表-3に示す。

表-3 授業参加意識と授業理解意識に関わる変容

		4 月	7 月
参 加 意 識	人 数	74	74
	平 均	4.49	4.73
	標準偏差	0.75	0.51
	t=3.28 df=73 p<.05		
理 解 意 識	人 数	74	74
	平 均	4.49	4.74
	標準偏差	0.75	0.50
	t=3.56 df=73 p<.05		

表-3に示した結果より、4月(受講2回目)と7月(受講最終15回目)の本授業の授業参加意識と授業理解意識を比較すると、授業参加意識については、4月の平均値4.49に対して7月の平均値は4.73となり有意に高くなった(p<.05)。また授業理解意識についても、4月の平均値4.49に対して7月の平均値は4.74となり有意に高くなった(p<.05)。

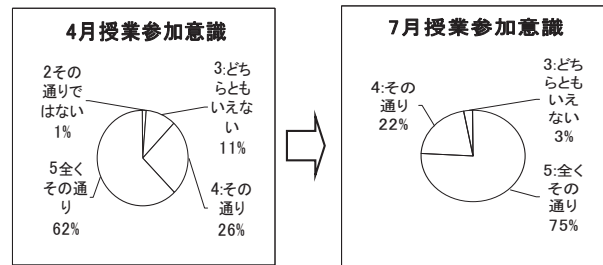


図-4 4月と7月の「授業参加意識」の変容

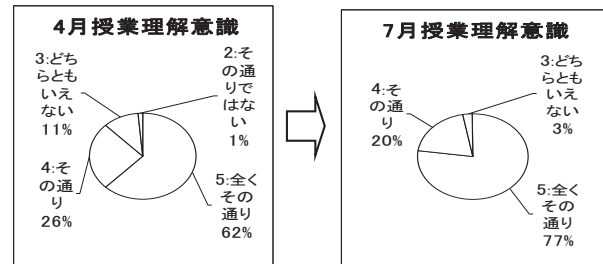


図-5 4月と7月の「授業理解意識」の変容

上の図-4と図-5は、表-3の結果をグラフ化したものである。回答5(全くその通り)と回答4(その通り)を合わせた割合で、4月と7月の意識を比較すると、「授業参加意識」については、4月88%は7月には97%となった。また「授業理解意識」については、4月88%は7月には97%となり、どちらも高い割合になった。

以上の結果から、本研究で究明してきた「主体・能動・対話的で参加型授業」を目指して取り組んだ実践手法による授業改善は、多くの学生たちから肯定的に受け取られたと判断している。

(2) 「主体・能動・対話的で参加型授業」を受講した学生の実感に関わる意識調査

- ① 対象 本学3年次生 93名 有効回答 87名
(教育学部68名, 保健医療学部19名)

② 実施手続き

最終授業時に表-4の質問内容を記した質問紙を配布した。質問紙には、米国高等教育学会の研究グループが中心になって開発した「優れた授業実践のための7つの原則」の内6つの原則を取り上げた。また、それぞれの原則の中の実践手法は米国高等教育学会の研究グループが提案したものに、本授業の特質に照らして共同研究者

が取り上げた実践方法を合わせた18の質問項目のそれぞれについて、学生の実感を5件法で評定させた。

5：全くその通り 4：その通り 3：どちらともいえない
2：その通りではない 1：全くその通りではない

③ 実施時期 平成29年7月26日（最終受講15回目）

④ 結果

本授業で目指した「主体・能動・対話的で参加型授業」に対する学生の実感に関わる意識調査の結果を表-4に示す。

表-4 主体・能動・対話的で参加型授業に対する学生の実感

実践手法	質問内容	\bar{X}	SD	順
1. 教員と学生の コンタクト $\bar{X}=4.29$ SD=0.77	ア、「出席・振返り」カード導入し、教員との意見・相談の連絡が取りやすくなった。	4.28	0.76	2
	イ、指導者から学生へ話や態度による交流が見られる。	4.30	0.78	1
2. 学生間の協力 $\bar{X}=4.03$ SD=0.82	ウ、教室内の雰囲気良くなってきた。	4.21	0.78	5
	エ、他生徒の対話や交流が多くなってきた。	4.08	0.82	8
	オ、グループ編成は人間関係醸成を目指している。	3.94	0.91	14
	カ、グループ内の話し合いが、できるようになった。	3.91	0.85	15
3. 主体・能動・対話的で参画型授業での学び $\bar{X}=4.00$ SD=0.85	キ、授業への興味・関心が増してきた。	3.87	0.91	16
	ク、本授業法によって学習は深まってきた。	4.17	0.78	6
	ケ、本授業法での学びを教育実習等で活かしている。	4.06	0.80	9
	コ、グループワークシート導入により、学習は深まってきた。	3.95	0.89	13
	サ、グループ内での話し合いにより、学習は深まってきた。	3.98	0.85	12
4. 学生へのフィードバック $\bar{X}=3.89$ SD=0.90	シ、学生の模擬講話に対する意見・感想等の交流は、有効であった。	4.05	0.87	10
	ス、前時の授業感想の発表や助言により、授業は深まった。	3.72	0.90	17
5. 授業時間の大切さ $\bar{X}=4.21$ SD=0.82	セ、授業直前、予め連絡事項・目標の板書や展開の説明を入れたが、スムーズな授業進行のために有効であった。	4.16	0.81	7
	ソ、本授業は、講義当番及び他の役割学生と共に進めてきたが、スムーズな授業進行のために有効であった。	4.25	0.84	3
6. 多様な指導法 $\bar{X}=3.81$ SD=0.97	タ、本授業は、全員が役割を担当し、参画型で多様な指導場面を設定したが、今後、学校現場で参考にしたい。	4.03	0.80	11
	チ、多くの学生との学習場面及び人間関係を深めるため、毎月、席替えを行ったが有効であった。	3.59	1.14	18
	ツ、本授業は、通常の指導以外に、学級会、集会活動等、多様な指導場面を導入したことは有効であった。	4.25	0.84	3

【「実践手法」の実感について】

表-4の「実践手法」（1～6）欄内の \bar{X} ,SD値は、右欄の「質問内容」の合計得点を反映させた大体的な傾向を把握した数値である。

その結果、学生が「主体・能動・対話的で参加型授業」に繋がると実感した実践手法の順は、①「1. 教員と学生のコンタクト」4.29, ②「5. 授業時間の大切さ」4.21, ③「2. 学生間の協力」4.03, ④「主体・能動・対話的で参加型授業での学び」4.00, ⑤「多様な指導法」3.81, ⑥「学生へのフィードバック」3.89となった。

したがって、学生は教員とのコミュニケーション等による交流を期待していることが掴めた。また、授業時間の大切さを挙げていることから、本授業への期待もあって、できるだけ無駄の無いスムーズな授業展開を願っていること等が読み取れる。

【「質問内容」の実感について】

質問内容は18項目あり、どの項目も平均値は3.59～4.30の中にあり全体的に肯定的実感となっている。

次に、各実践手法内の質問内容に対して、学生が「主体・能動・対話的で参加型授業」に繋がると実感したものの内、平均値が4.00以上の質問内容を挙げると次の通りであった。

①「イ。指導者から学生へ話や態度による交流が見られる。」4.30 ②「ア。出席・振返りカード導入し、教員との意見・相談の連絡が取れやすくなった。」4.28 ③「ソ。本授業は、講義当番及び他の役割学生と共に進めてきたが、スムーズな授業進行のために有効であった。」4.25 ④「ツ。本授業は、通常的な指導以外に、学級会、集会活動等、多様な指導場面を導入したことは有効であった。」4.25 ⑤「ウ。教室内の雰囲気が良くなってきた。」4.21 ⑥「ク。本授業によって学習は深まってきた。」4.17 ⑦「セ。授業直前、予め連絡事項・目標の板書や展開の説明を入れたが、スムーズな授業進行のために有効であった。」4.16 ⑧「エ。他学生の対話や交流が多くなってきた。」4.08 ⑨「ケ。本授業法での学びを教育実習等で活かしている。」4.06 ⑩「シ。学生の模擬講話に対する意見・感想等の交流は、有効であった。」4.05 ⑪「タ。本授業は、全員が役割を担当し、参画型で多様な指導場面を設定したが、今後、学校現場で参考にしたい。」4.03

以上、平均値4.00以上の質問内容は、「主体・能動・対話的で参画型の授業」に繋がると実感された実践手法であり、有効な授業改善であったと言える。

また、本研究の主要なねらいと合致している「ク。本授業によって学習は深まってきた。」4.17, 「エ。他学生の対話や交流が多くなってきた。」4.08の平均値も4.00以上となっており、学生たちの肯定的な実感を得ることができている。

なお、肯定的な実感の比較的低かった「チ。多くの学生との学習場面および人間関係を深めるため、毎月、席替えを行ったが有効であった。」3.59については、班内

メンバーは変わらずに班ごとの座席移動を行ったため、中には個々の座席替えを希望する学生も居たことが数値に表れていると考えられる。

(3)「主体・能動・対話的で参画型の授業」に対する学生の自由記述による実感

- ① 対象 本学3年次生 93名 有効回答 87名
(教育学部68名, 保健医療学部19名)
- ② 実施手続き
最終授業時, 自由回答「本授業を受講した実感を記述してください。」と記した調査用紙を配布した。
- ③ 実施時期 平成29年7月26日(最終受講15回目)
- ④ 結果
学生たちの本授業を受講した実感の回答は, 多岐にわたり, その内容を筆者が分類・整理してまとめた内容を上位順に, 次の表-5に示す。

表-5 「主体・能動・対話的で参画型の授業」に対する学生たちの自由記述による実感

学生の本授業受講の実感	複数回答	
	人数(人)	割合(%)
○ 班編成, 班内の話合いや発表, 実習等の計画に工夫があり, 学生の意欲や責任感は発揮され, お互いのコミュニケーションも深まり楽しく意義ある授業になった。	25	32.5
○ 本授業の主体的・対話的で参画型の指導法から学ぶことが多く, 現場で活かしたい。	21	27.3
○ 他学部の学生との班編成により交流が深まった。また, 主体的・対話的で参画型の授業により, 色々な学びや交流機会が増え, 学修姿勢も意欲的になった。	14	18.2
○ 毎時の3分スピーチ発表とその後のコメントに付いての班内の話合いは有効で参考になった。	6	7.8
○ 他者と共に学ぶ機会が多く, 質の高い授業に高まった。	5	6.5
○ 本授業では眠くなったりマンネリ化を感じる事が無かった。		5.2
○ 月交代の班移動は, 数回の授業ごとにメンバーを代えて行っても良いかと思った。	3	3.9
○ 本授業は, 教員の一方的な指導ではなく学生も参画して全員で学修を深め合っている思いが強く, 雰囲気も良かった。	2	2.6
○ 全員に役割があって分担することにより, 授業への自主性が高められた。	2	2.6
○ 毎回, 前時の授業振り返りは, 理解を一層深めることができた。	2	2.6
○ その他	5	6.5

学生たちの本授業を受講した実感は, 表-5に示している通り, 肯定的な実感ばかりであった。上位に上げられた内容は, 次の三点であった。

1. 「班編成, 班内の話合いや発表, 実習等の計画に工夫があり, 学生の意欲や責任感は発揮され, お互いのコミュニケーションも深まり楽しく意義のある授業になった。」(25名 32.5%)
2. 「本授業の主体的・対話的で参画型の指導法から学ぶことが多く, 現場で活かしたい。」(21名 27.3%)
3. 「他学部の学生との班編成により交流が深まった。また, 主体的・対話的で参画型の授業により, 色々な学びや交流機会が増え, 学修姿勢も意欲的になった。」(14名 18.2%)

5. 学生たちの学修成果物の共有

教員を目指している学生たちが, 毎時2名, 中学校2年の学級担任を想定して, 「朝の会」における学級講話を3分スピーチにより全員の前で発表してきた。

3分スピーチのテーマ・内容は, 本授業に関わる自らの体験等であり, この時間帯は, 発表者, 司会者そして聞く学生たちは大変熱が入り, 発表後の話合いも活発であった。なお, 発表機会を持つことのできなかつた学生は, 自主レポートにして提出した。

3分スピーチの内容は, 下の図-3の通り「模擬講話」文集として139頁にまとめ, 学修成果を全員で共有することができた。文集づくりは, 文集担当の学生が行った。このような授業過程, 実践手法を通して指導者と学生たちのコンタクトも深まったと考えている。

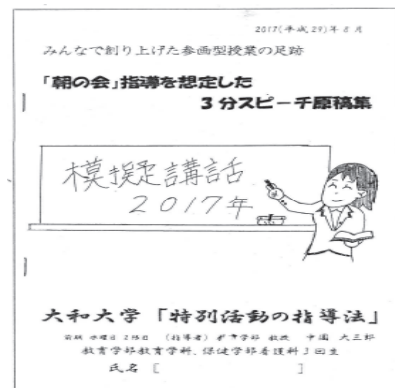


図-3 「模擬講話」文集 (3分スピーチ原稿)

[結 果]

1. 調査研究 (1)

「本授業を受講した学生の「授業参加度」「授業理解度」に関する意識調査

○ 本研究で取り上げた「主体・能動・対話的で参加型授業」に関わる授業改善の有効性について、まず学生の意識面からの全体的な傾向を調べた。その結果、本研究で試みた授業改善により、学生たちの授業への「授業参加度」と「授業理解度」の意識は向上したことが掴め、本研究の仮説を全体的に検証することができた。

2. 調査研究 (2)

「主体・能動・対話的で参加型授業」を受講した学生の実感に関する意識調査

○ 学生が「主体・能動・対話的で参加型授業」を受講し終えた後の実感を、18項目の質問によって調べた結果、全ての回答の平均値は、3.59～4.30の中に有り、全体的に肯定的な実感を持っていることが分かった。したがって、本研究で取り上げた実践手法による授業改善は有効であったと言える。

3. 調査研究 (3)

「主体・能動・対話的で参画型の授業」に対する学生の自由記述による実感

○ 自由記述によって、学生の「主体・能動・対話的で参画型の授業」に対する実感を調べた結果、効果のあった実践手法が具体的に記述されていた。

効果があつたと実感された実践手法には、班組織、話し合い、班内や全体での発表、班移動(席移動)、学生の参画、前時授業振り返り、学生同士の交流、スピーチ発表と意見交換、役割分担導入等が上げられた。

[考 察]

○ 大教室における大人数受講の授業であっても、本研究で取り上げた実践手法を導入し、教授パラダイムと学生参画を多く取り入れた学習パラダイムを意識した授業改善を行うことにより、学生たちの主体・能動・対話的で深い学びの学修姿勢を引き出せること、また、学生たちの参画型授業に高められることが本研究で明らかになった。

○ 本研究における仮説を検証することのできた大きな要因は、学生全員が役割を担当し、教員と協働して授業づくりを行えた自覚や自己有用感を持つことができたことにあると本共同研究者は考えている。このことは、学生の本授業参画への期待と思われる言動を見たり、聞いたりすることがよくあること、また、指導者とのコミュ

ニケーションが多くなり全体的に前向きな授業姿勢が見られたこと、真摯な授業雰囲気が醸し出されたこと等に表れており、その結果が学生の毎時の授業出席率は平均95.0%になっていることに結びつく。

○ 課題としては、大教室における大人数受講の授業において「学生の主体・能動・対話的な参画型授業」を推進するには、事前の計画・準備、そして事後の処理や評価等にかなりの時間と労力を要するので、ティーチング・アシスタントなどの教育サポートスタッフ配置を期待しているところである。

[引用・参考文献]

- 1) 文部科学省大学審議会 (1998) 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」配布資料 p.3
- 2) Chickering & Gamson(1987) 「Seven principles for good practice in undergraduate education」AAHE Bulletin, 39(7), 2-6.
- 3) 文部科学省大学審議会 (1998) 「21世紀の大学像と今後の改革方策について」配布資料 p.3
- 4) 溝上慎一 (2014) 「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂 pp.36-37
- 5) 公益社団法人私立大学情報教育協会 (2014) 「私立大学教員の授業改善白書」2014年度調査結果 p.40
- 6) 前掲書 p.41
- 7) 京都大学高等教育教授システム開発センター編 (1997) 「開かれた大学授業をめざして 京都大学公開 実験授業の一年間」玉川大学出版 p.16
- 8) 児玉善仁編 (2004) 「大学の指導法―学生の自己発見のために―」東信堂 p.79
- 9) 中井俊樹・中島英博著 (2005) 「優れた授業実践のための7つの原則とその実践手法」名古屋高等教育研究 第2号 p.286
- 10) 前掲書 p.286

